

東方世界におけるアイデンティティの揺らぎとサラセンの王女 中英語ロマンス *Bevis of Hampton* を中心に*

趙泰昊

0. はじめに

14世紀の中英語ロマンス *Bevis of Hampton* の中で主人公である *Bevis* は生涯の大半を東方の国で過ごすこととなり、東方世界におけるキリスト教徒と異教徒の交流は物語の主題の一つであると言える。本論考では、東方への旅を題材とする中世後期の旅行記やエスノグラフィを比較対象として取り上げながら、この物語における *Bevis* のアイデンティティの証明の過程を分析する。また、論考の後半では、*Bevis* のこうした identity negotiation において、のちに彼の伴侶となるサラセンの王女 *Josian* の果たす役割を明らかにし、キリスト教徒の騎士を引き立てる存在として単純化して語られることの多いサラセンの王女の役割を再検討することを試みる。

1. 中世の旅行記における自己を相対化する他者の眼差し

Shirin A. Khanmohamadi が指摘するように、遠方の地へと赴く旅を描いた中世の旅行記やエスノグラフィにおいて語り手が遭遇することになる文化的・宗教的他者の視線は、西洋キリスト教的な規範や常識を相対化する機能を備えており、結果として西洋世界に属する語り手や読者に自らのアイデンティティの再定義を促すことになる (pp. 4-5)。例えば、13世紀にモンゴルを訪れたフランシスコ会修道士ルブルックのウィリアムは東方の地で遭遇する現地の文化や風習を西に伝える一方で、さまざまな場面において西洋世界のキリスト教徒の文化を相対化する他者の「視点」を紹介している。また、中英語で書かれた『マンデヴィルの旅行記』の中では、キリスト教徒以上にキリスト教をよく知る非キリスト教徒が登場し、キリスト教徒の欠点を明らかにしている (p. 88)。

こうした旅行記の特徴（他者の視点を導入し、自己を相対化する性質）は、同様に遠方への旅を題材とする中英語ロマンスにおいても観察することができる。ロマンスで描かれる地理区分は現実の地形を反映するものであるというよりも自己と他者の精神的・象徴的な距離を示したものであり、*Rouse* が指摘するように、主人公の旅を描く物語においてこうした彼我をめぐる区分は解体され、新たな定義を求められることとなるのである (p. 137)。

2. *Bevis of Hampton* における東方への移動と「他者化」の恐怖

同時代の旅行記同様、*Bevis of Hampton* においても主人公のアイデンティティは東方におけるサラセンとの交流の中で相対化されることになる。キリスト教徒である *Bevis* の自己認識に初めて揺らぎが生じるのは、1人のサラセンによって「クリスマスが何の日か」と質問を投げかけられる場面においてである (585-606)。幼くしてキリスト教圏である故郷を離れた *Bevis* は、この質問に対して明確な回答をすることができない (593-98)。キリスト教徒としてのアイデンティティの基盤となる信仰についての知識が不十分であった *Bevis* は、よりふさわしい知識を備えた異教徒によってそのアイデンティティの根幹を揺さぶられることになるのである。

同様の揺らぎは続く場面においても見ることができる。のちの場面において、*Bevis* は彼を探して旅をするイングランド人 *Terri* に対して、自らの正体を隠し、自身をサラセンの *Ermin* 王と兄弟同然の関係であると説明している (1330-32)。イングランド人でありながらまるでサラセンのように振る舞う *Bevis* の passing（なりすまし）が同郷の *Terri* に看破されることがなかったという事実は、キリスト教徒である *Bevis* とサラセンの間に存在する明確な区別が失われていることを示唆している。すなわち、東方世界でサラセンに囲まれて過ごす *Bevis* は、キリスト教徒、あるいはイングランド人としてのアイデンティティを失いつつあると言えるのである。

こうした東方世界に滞在する西洋人の性質の変化に対する不安は、同時代の十字軍をめぐる言説においても確認することができる。例えば、*Pierre Dubois* が14世紀初頭に記した十字軍発足を促すための文書の中では、遠方の地に移住した人々の身に生じる性質の変化に対する不安が述べられている (p. 114)。個人の生まれ持った性質が固定的なものではなく、空間的移動によって変化する可能性があるものとして理解されていたとすれば、幼くして東方へと移住した *Bevis* の性質の変化をめぐって、同様の想像が働いていたと解釈することができる。

こうした解釈を裏付けるように、物語の末尾において語られるロンドンを舞台としたエピソードでは、*Bevis* 自身がロンドン市民と敵対する存在として描かれており (4327-38)、その後 *Bevis* は故郷を離れ東方へと帰っていく (4570-74)。こうした描写は *Bevis* の持つ性質の変化を端的に示すものであると言える。*Kofi Campbell* を含む多くの先行研究によってイングランドのナショナルアイデンティティ、あるいはキリスト教徒としての規範を示したと考えられてきた *Bevis* の物語は、「イングランド人であること」、「キリスト教徒であること」といった自己定義の根幹を成す要素が極めて流動的なものであるという事実を示唆していると考えられるのである。

3. Identity Negotiation におけるサラセンの王女の役割

同時代の旅行記との共通点からこの物語を見れば、これが東方を旅する個人によるアイデンティティ模索の過程を描いたものであることがわかる。こうした Bevis によるアイデンティティの模索において、サラセンの王女 Josian は重要な役割を果たすことになる。本セクションでは、自らをキリスト教世界に同化しようとする彼女の振る舞いが、Bevis によるアイデンティティの証明のプロセスと重なり合っていることを指摘する。

Bevis の自己定義を補助するという Josian の役割は、物語の冒頭、彼女の存在が初めて言及される場面においてすでに暗示されている。ここでは美しさを讃える典型的な貴婦人の描写(518-25)に加え、Josian が「キリスト教については何も知らなかった(526)」という一文が添えられており、この描写の直後には先に言及したクリスマスをめぐるサラセンとの問答が続いている。Bevis の宗教的アイデンティティが「より知識を備えたサラセン」によって揺らいだ一方で、のちにキリスト教徒となる Josian が Bevis 以上にキリスト教について無知な存在として描かれることで、Bevis のキリスト教徒としてのアイデンティティは再び優位に立つものとして位置付けられているのである。続く場面でも同様に、Josian が男性である Bevis をより「知識を持った」存在として提示する様子が描かれており(1189-99)、こうした彼女の振る舞いは宗教とジェンダーを結びつけながら、結果として Bevis 自身のもつキリスト教徒としてのアイデンティティをさらに強固なものとして示す役割を果たすことになる。

その後の展開において Josian は彼女を狙う求婚者によって度々危機に晒されることになる。Josian の身体へのこうした危機的状況は、のちに彼女と結婚する Bevis 自身のキリスト教徒としてのアイデンティティにも関わる問題となる。Bevis はイェルサレムの大司教に「純潔の乙女を伴侶とする」ことを命じられており(1959-69)、Josian にもこの条件を求めている。そのため、危機的な状況において自らの身を守ろうとする Josian の努力は、キリスト教徒の伴侶となるための条件であると同時に、Bevis のキリスト教徒としての誓いを守るものとなるのである。物語後半に囚われの身となった Josian は、アルメニアの故郷において学んだ医学と薬学の知識を活かし、求婚者であるサラセンの目を欺いている(3671-84)。Josian は自らのサラセンとしての出自と結びついた知識を活用することで、キリスト教徒となった自身と、夫である Bevis の立場を守り抜いていると言えるのである。

このように、主人公である騎士と比べ受動的な存在として理解されることのあるサラセンの王女ではあるが、物語における Josian の振る舞いはより積極的な意義を付与されている。中世のロマンスに頻出するサラセンの王女はキリスト教の優位性を示すだけの受動的な存在ではなく、両者の間を行き来する存在として、キリスト教徒のアイデンティティの確立を積極的に証明する役割が期待されているということができるかもしれない。

4. おわりに

中世後期の旅行記やエスノグラフィの中で外部世界の他者が語り手や読者の視点を相対化するように、東方世界を舞台とする *Bevis of Hampton* においても主人公である Bevis は他者によって自らのアイデンティティに疑いを投げかけられ、これを再定義することを求められることになる。物語において、主人公によるこうした冒険は、サラセンの王女によって支えられることとなる。異教徒に対するキリスト教徒の優位性を示すために登場すると捉えられることの多いサラセンの王女は、キリスト教徒とサラセンの視点を行き来する相対的な視点によって、騎士によるアイデンティティの再定義を促し補強する、より積極的な役割を付与されていると言えるのである。

5. 主要参考文献

Bevis of Hampton in Four Romances of England, ed. by Ronald B. Herzman, Graham Drake, and Eve Salisbury (Kalamazoo, MI: MIP, 1999), pp. 187-340

Dubois, Pierre, *The Recovery of the Holy Land*, trans. by Walther I. Brandt (New York: Columbia University Press, 1956)

Mandeville's Travels: Translated from the French of Jean d'Outremeuse, ed. by P. Hamelius, EETS o.s. 153 (London, Oxford University Press, 1919)

The Mission of Friar William of Rubruck, ed. by Peter Jackson (London: The Hakluyt Society, 1990)

Campbell, Kofi, 'Nation-building Colonialist-style in *Bevis of Hampton*', *Exemplaria*, 18 (2006), 205-32

Khanmohamadi, Shirin A., *In Light of Another's Word: European Ethnography in the Middle Ages* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2014)

Rouse, Robert, 'Walking (between) the Lines: Romance as Itinerary/Map', in *Medieval Romance, Medieval Contexts*, ed. by Rhiannon Purdie and Michael Cichon (Cambridge: Brewer, 2011), pp. 135-47

*本研究は JSPS 科研費 22K00425 の助成を受けたものである。